The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	加藤先生と過ごした日々
Author(s)	丹下, 暖子
Citation	語文. 2020, 115, p. 4-6
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88505
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

加藤先生と過ごした日々

丹下暖子

加藤先生に最後にお目にかかったのは、二〇二〇年三月十八日のことだった。場所はホテルオークラ神戸、瓦井裕子さんも一緒だった。

その一週間ほど前、春休みに入り、神戸の実家に帰省することにした私は、先生にメールをお送りした。短時間でもご挨拶に伺うことができれば……と思ったのだ。「コロナ禍」という言葉を耳にするようになってはいたものの、まだ「ソーシャルディスタンス」が定着していない頃だった。ややためらいがちにメールした私に、先生は「今は電車で移動するのもリスクだから、私が車で動く」と返信してくださった。恐縮していると、「神戸まで行くのは気分転換になるのだ」とおっしゃってくださった。

加藤先生のお人柄を物語るエピソードだと思う。

あの日、先生はお痩せになってはいたが、いつもの調子でお嬢さんのこと、関西大学の学生さんのこと、その他いろいろと話してくださった。私は何を話したのだろう。「夏休みには関大の研究室に遊びに行きます」と申し上げたことはよく覚えている。叶わぬ約束となってしまった。

加藤先生との出会いは二〇〇六年四月に遡る。先生が大阪大学に着任されたとき、私は博士後期課程一年だった。新しくいらっしゃった先生はどんな授業をなさるのだろう。そんな思いで、金曜三限の大学院演習を受講した。授業は、先生の研究室で行われた。

確か、初回の授業のときだったと思う。貸し出しノートを片手に、「私の研究室にある本は、どれでもお貸ししますよ」とおっしゃった。先生にとっては何気ない一言だったかもしれないが、私には先生を象徴する一言のように思えて、強く印象に残っている。本でも何でも、持っているものを惜しみなく学生に与えようとする方だった。

その後の十数年間で研究に関する本をお借りすることはあまり

なかったが（大学図書館で事足りたのだ）、何冊かお借りした。なぜか万城目学『プリンセス・トヨトミ』だったり、『未来の年表人口減少日本でこれから起きること』、『大学大倒産時代』といった新書だったり……。これらの本は、私が研究室に伺った際に、「最近、こんな本を読んだ」と言いながら、さっと渡してくださったものだ。手渡されなければ、読まなかったかもしれない。先生が与えてくださったものの多さに、あらためて気づかされる。

さて、肝心の演習は、伊勢物語の本文研究に関するものだった。シラバスには「源氏物語の注釈書『奥入』を読む」とあったはずだが、木下（藤原）美佳さんが伊勢物語を研究されていたこともあって、この内容になったと記憶している。今、当時のレジュメを見直すと、穴があったら入りたい……という気持ちになるのだが、あの時期に本文研究の一端に触れることができたのは、ありがたいことだった。

二〇一〇年四月、荒木浩先生が国際日本文化研究センターに移られ、加藤先生が私の指導教員となった。それまでも院生発表会や大阪大学古代中世文学研究会でご指導をいただいていたが、やはり緊張したし、どこか遠慮する気持ちもあった。同時にそれを隠そうと、つとめて明るく振る舞った。先生には、私の気持ちなどお見通しだっただろうが。今から思うと、博論提出を控えた学生を途中から指導するのは大変だったに違いない。私にとっては、緊張や遠慮はあったにせよ、荒木先生とは違う視点からご指導いただく機会が与えられたのであり、自分の研究を見直すきっかけにもなった。結果的に二人の恩師に恵まれたのだから、私は果報者だ。

大学院修了後の二〇一一年四月からは、木下さんとともに特任研究員として、『伊勢物語校異集成』（二〇一六年、和泉書院）の刊行に向けた研究に携わらせていただいた。この研究の意義はきっと木下さんが書かれているだろうから、ここでは語らない。私たちは真名本の校異収集作業に従事したが、要領の悪いことをしていたような気がする。先生がご自分でなさったほうが早いこともあっただろう。それでも、辛抱強く見守り、指導し続けてくださった。東海大学や国文研での調査にご一緒した日のことが、昨日のことのように思い出される。先生が調査されるそばで、一日中作業した。本に向き合う姿勢、調査に対する姿勢を直に学ばせていただいた。贅沢な時間だった。

二〇一六年に就職してからも、時折、研究室に伺った。前任校（甲子園大学）から阪大までは電車で二十分弱だったから、授業を終えた後にふらりと立ち寄ったこともある。関東に移ってからも、長期休みの際には必ず近況報告に伺った。鋭いご指摘に緊張することはあったが、遠慮はもうなかった。

先生とは、さまざまな話をしたと思う。一つ一つを鮮明に覚えているわけではないが、日常生活のふとした瞬間に「あぁ、加藤先生はあんなことをおっしゃっていたな」と思い出す。そういえ

ば、仕事をする中で理不尽に思えることがあって、愚痴を言ってしまったこともある。私の話を静かに聞いてくださった先生は、一言、「丹下さんはこれまで恵まれた環境にいて、守られてきたからねぇ」とおっしゃった。はっとさせられ、自分の幼さを恥じ入ったのだった。

今、この言葉を思い出すと、胸が苦しくなる。恵まれた環境を与え、守ってくださったのは、他ならぬ加藤先生だったから。

二〇一七年四月、先生の科研に研究分担者として加わらないかというお誘いをいただいた。古今集の校本刊行を目的とした科研で、伊勢物語のときのようにまた一緒にやらないか、と声をかけてくださったのだ。先生が校本刊行に向けて作業なさっていることはよく知っていた。それがいよいよ形になること、何よりまたご一緒できることが本当に嬉しかった。

この科研に関連して、先生の今後のご計画を少し伺ったことがある。「この先、十年分ぐらいの研究の材料がある」とおっしゃっていた。古今集の校本のタイトルは『古今和歌集校異集成』で、「我ながら独創性のないタイトル」とおっしゃっていた。まだ途中だった。悔しいという言葉では足りない。

加藤先生から最後にメールをいただいたのは、二〇二〇年八月二十日のことだった。「ソーシャルディスタンス」もすっかり定着し、関西大学に伺うどころではなくなっていた。せめて残暑見舞いのメールでも……と思い、お送りしたところ、返信をくださった。そこには、体調が思わしくないこと、そして研究のことが書かれていた。「引き継いでやってくれませんか」という言葉に、ただならぬものを感じ、頭が真っ白になった。

メールの最後の一文を、ここに引用させていただく。

丹下さんの研究の幅を広げる可能性の一つとして、意味はあると思います。

最後まで、教え子のことを思い、導いてくださる先生だった。

あの日から、私は幾度となく最後のメールを読み返している。ぽっかり空いた穴が埋まることはないけれど、この追悼文（とも呼べない、ただの「とはずがたり」）を書き終えたら、前に進もうと思う。「私は加藤先生の教え子です」と、胸を張って言えるように。

加藤先生、ありがとうございました。

（たんげ・あつこ　昭和女子大学専任講師）